

「タイム」誌の二世
影響力のある10
一人に選ばれた。

戦争と 平和を語る

現代史の
一利氏が、
昭和史と
作家の
憲法の
赤坂
た解説も
(日経



三十数
被害調査、
米国教
からか
事故と
マと
えた。

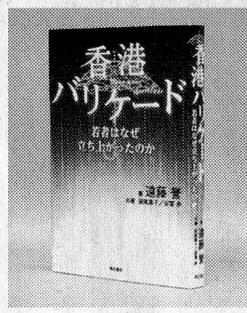
担当の遺子に自組いで、
2 発Hして、
これる
驅れる
得る
完
H
研

香港バリケード

明石書店
1728円

遠藤 誉 著

深尾 葉子、安富 歩 共著



昨年秋に79日もの間、香港の幹線道路を占拠した民主化運動、いわゆる「雨傘革命」。香港居住経験のある評者も、焦りのような感情にかられ、現場へ出かけた。しかしこの占拠は歴史や政治が複雑にからみあい、なかなか理解しにくい

のが実情だった。社会主義と資本主義の狭間におかれた元英領の香港は、中国の共産化を嫌って亡命した人を先祖とする中国人が多数を占める、いわば元・難民社会である。中国に対する距離感も感覚も個々人で異なる、モザイクのような社会だ。そんな香港をひも解くには、向き合う側にも複

胸に迫る新世代の熱情

昨秋に79日もの間、香港の幹線道路を占拠した民主化運動、いわゆる「雨傘革命」。香港居住経験のある評者も、焦りのような感情にかられ、現場へ出かけた。しかしこの占拠は歴史や政治が複雑にからみあい、なかなか理解しにくい

眼的思考が求められる。そんな折、本書を手にした。惹かれたのは執筆陣の顔ぶれである。長春に生まれ、辛酸をなめつくした個人史を持つ中国ウォッチャーの遠藤氏。金融機関勤務経験があり、天安門事件に遭遇した経済学者の安富氏。90年代に香港に留学した東洋史学者の深尾氏。三者三様の著者は、専門分野から香港を照射した。共産党によるたたかな支配方法を知り尽くす遠藤氏は、香港の憲法ともいえる基本法の解釈の幅の広さや香港の民主派の脇の甘さを指摘し、自由があるからこそ香港が金融中心として存続でき、金の卵であると安富氏は説く。深尾氏は現場で出会った香港人の生の声を丁寧に掲げ上げる。路上の視点と、東アジア全体から見た香港の位置付けという

の点が、向き合う側にも複

ノンフィクション作家

星野 博美 評

マクロな観点が融合し、ここにようやく香港の全貌が鮮やかに浮かび上がった。生存空間が狭められる閉塞感の中、立ち上がった香港の新世代の純粹さと熱情は胸に迫るものがある。旧世代のように「逃げる」ことを選択せず、自分の愛する香港を守るために挑んだ命がけの戦い。絶対に譲れない自由と民主。民主化要求が失敗したと考えるのは早計だろう。これは長い闘争のほんの始まりであり、彼らが全世界の心ある人々を覚醒させたことだけは間違いない。彼らは未来に道をつなげた。私はそこに、確かに希望を見たのである。

えんどう・ほまれ 41年生まれ。筑波大学名誉教授。
ふかお・ようこ 63年生まれ。大阪大学准教授。
やすとみ・あゆむ 63年生まれ。東京大学教授。